

王のモノグランマが付与された十一世紀のシャルトル司教文書：封建期フランスにおける文書実践と王権

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1804167>

出版情報：史淵. 154, pp.69-93, 2017-03-17. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

王のモノグランマが付与された 11世紀のシャルトル司教文書 —封建期フランスにおける文書実践と王権—

岡 崎 敦

はじめに

「文書形式学は、今や文書資料を記述、批判したり、その生成や伝来について説明することだけを目標とはしてはいない。証書やその他の文書資料を、ある時代の社会的、文化的、法的な諸実践全体のなかに位置づけながら、当時の人々が、その時代が生み出し、保存してきた文書について、どのように認識していたのかにも関心を寄せているのである」⁽¹⁾。なかでも、従来、文書作成がもっとも衰え、形式が崩れたとみなされてきた、いわゆる封建期の文書実践について、近年、新たな観点からの再検討の動きが顕著に見られる⁽²⁾。特に、紛争解決研究との接合は、この時期の文書形式の多様化や乱れを、特定の環境のもとでの独自の文書利用の試みとみなす見方を強く促した。ここでは、いわゆる文書オリジナル以外の多様な文字資料が、さまざまな紛争解決の場面で果たした力の諸相とからくり自体を研究せねばならない⁽³⁾。

他方、ここ数十年の間に、封建期における王権や公権力のあり方について、従来のように、12世紀以降に克服されていく政治的アナキーと同一視する見方は相対化されつつある。そこでは、この時期における王権の機能が再評価されると同時に、君主権力や公権力のあり方を、時代や地域を越えていつも同じものとする見方（「普遍的実体主義」とでも称することができよう）が批判の対象となっている⁽⁴⁾。

本報告では、典型的な封建社会が形成されたとみなされてきた11—12世紀の北フランスにおける文書実践の諸相にアプローチする作業の一環として、パリ司教座教会を受益者として発給された、あるシャルトル司教文書を検討したい。この文書には、同時代作成の3つの単葉の用紙が伝来するだけでなく、その中の一つには、フランス王のモノグラム、すなわち王文書の法的効力を保証する記号で、王の署名の代わりという機能を果たすと理解されている図像が付されている。単一の文書と観念される資料に、三つの用紙が準備された理由以上に加えて、ここで奇妙に感じられるのは、後に見るように、王のモノグラムが付された用紙は、他の二つに比べて、その定式性が劣るようにみえることである。

以下、まずこのシャルトル司教文書について説明し、ついで、第三者の文書に付加される王のモノグラム、およびこの司教文書の内容である司教によるaltare譲渡に関する諸問題を論じたのち、最後に、この司教文書の作成と伝来状況について考察する。ここでの目標は、11世紀から12世紀初めの北フランスにおける文書実践において、ある変容が生じたことを明らかにすることである。

1. シャルトル司教アゴベルトゥス文書

本稿が検討の対象とする日付のないシャルトル司教アゴベルトゥスの文書は、パリ司教座教会参事会へのaltare譲渡をその内容とし、三つの単葉の用紙と、この文書の受益者であるパリ司教座教会のカルチュレール=文書集によって伝来する⁽⁵⁾。

現在、パリ所在の国立中央文書館のS系列254という請求番号が付された箱のなかに、パリ司教座教会のための日付のないシャルトル司教アゴベルトゥスの文書について、テキストがほぼ同じ、あるいは非常に類似する3つの単葉の用紙が納められている。この請求番号に該当する資料群は、パリ司教座教会参事会のフォンドの一部を構成するもので、該当番号は、パリからセヌ河を下ったところにあるパリ司教座教会参事会所領エポーヌ関連資料に対応して

いる⁽⁶⁾。この文書を転写したカルチュレールはいずれも、参事会のイニシアティヴによって作成されたものと考えられることから、これらの資料はいずれも、厳密にはパリ司教座教会参事会が伝来させてきたものと言える⁽⁷⁾。すべて獣皮紙からなる3つの単葉の用紙は、いずれも11世紀、遅くとも12世紀初め以前のもので判定される書体で書かれており、発給者のシャルトル司教アゴベルトゥスが在位した1048年から1060年という年代に符合する⁽⁸⁾。単葉の用紙のいずれにも印章は付された痕跡はないが、これはこの時代の司教文書として、特に異常ではない⁽⁹⁾。

現在、S 254, no 1 A (以下、単に1 Aと標記) という番号を与えられている用紙は、縦590から582mm、横409から411mmのサイズからなる縦長の文書である。S 254, no 4 (以下、単に4と標記) という番号が付された用紙もまた、縦590から600mm、横425mmの縦長であるが、この両者のテキストはまったく同文で、文書下部の終末定式部分には、ともに司教アゴベルトゥスの下署と十字架記号が付されている。この二つの用紙はいずれも、かなり大きな用紙が使われ、行間を十分に空けて上から押した罫線上に、上下の線を強調する典型的な文書の書体で書かれている。縦長の形態自体、この時期には証書系文書として多く採用された形である⁽¹⁰⁾。

これに対して、S 254, 1 B (以下、単に1 Bと標記) の用紙は、縦233から230mm、横326から320mmと横長の形態を呈しており、他の二つの用紙に比べて大きさもかなり小さい。ここには司教の下署がない代わりに、フランス王アンリ1世の名前とモノグランマが、文書の右下に置かれている。体裁に関しては、上から押した罫線は見えるとは言え、行間は詰まっており、書体自体もむしろ書物のそれに類似する。さらに、横長の形態は、同時期にはむしろノティティアで多く見られる⁽¹¹⁾。しかしながらより重要なのは、テキスト自体における若干の相違とともに、この用紙1 Bに書かれたテキストの証人欄が、1 Aおよび4と大幅に異なることである。文書の体裁を強く示す二つの用紙(1 Aおよび4)に記載される下署者は基本的にシャルトル司教座教会の聖職者であるのに対して、1 Bにおいて5段に別れて記載される下署欄には、シャ

ルトル司教の下署がない一方（ただし、3段目中央の十字架は、司教が名前を記すことなく、みずからしるした記号とする解釈もありえる）、4名の他の司教座の司教や、王の弟を始めとする俗人諸侯、伯や副伯たち、その他の聖俗の者たちが多数列挙されている。特に、ランス大司教以下の司教たちからなる4段目、王の弟や伯たちからなる5段目、そして、その下部に置かれた王のモノグランマについて、インクおよび筆跡が若干異なるようにも見え、この部分は後から追加された可能性がある（稿末のテキスト対照表参照）。

12世紀はじめに、パリ司教座教会で編纂されたカルチュレール *Liber Niger* は、基本的には1Aあるいは4のテキストを転写したものと考えられるが、部分的に1Bのテキストを再録していると推測できる箇所もある⁽¹²⁾。たとえば、罰則条項が書かれるサンクチオと呼ばれる部分で、1Bにしか見られない *ea etiam bona sunt, si quis* が挿入されている。また、文書の中核部分の司教の法行為が語られる措置部において、1Aでは「参事会員に対して」とある箇所で、1Bは「司教および参事会員に対して」とあるが、ちょうど「司教および」の箇所に当たる場所において、カルチュレールには一旦文字を書いて消した痕跡があり、その分量は「司教および」の単語数に一致する。おそらく、1Aあるいは4を基本として転写しつつ、1Bも参照していたものと推測される（稿末のテキスト対照表参照）。

ここで、このシャルトル司教文書について触れた先行研究について言及しておこう。

この文書の刊本は、現在でも、19世紀半ばにパリ司教座教会カルチュレールを取捨選択しながら関係資料を刊行したゲラルルのそれが、唯一のものである⁽¹³⁾。この史料集の当該箇所では、13世紀のカルチュレールをもとに、アレンガ部分を大幅に削除したテキストが提示され、年代は根拠を示さず、1055年ごろとのみある。これに対して、1907年にフランス王アンリ1世の文書カタログを刊行したゼネは、より詳細な検討を加えており、ここで彼の意見を確認しておく必要がある⁽¹⁴⁾。

ゼネの見解については、まずその前提をはっきりさせておかねばならない。彼の仕事は、伝統的な王の事績研究の延長にあり、この王文書カタログには、厳密な意味での王文書以外の王の活動情報も含まれている。その上で、このシャルトル司教文書については、当然とは言え、単葉の用紙としては、王のモノグランマを持つ1Bしか取り上げられていない。その上で、彼はこの用紙について、11世紀あるいは12世紀前半のコピーで、オリジナルは失われたとの判断を下している。さらに、彼は、王の確認を受けていないシャルトル司教アゴベルトゥス文書として、前述のゲラルルの刊本とその典拠となったパリ司教座教会の13世紀のカルチュレールを掲げるばかりか、ゲラルルのテキストについて、この刊本には終末定式部の下署欄および本文の一部が欠けているとする。おそらく彼は、文書館では、1Bの用紙のみを認識し、その後、ゲラルルの刊本で、似たようなテキストのシャルトル司教文書を発見して、テキスト間の相違は、刊行者の削除によるものと判断したのであろう。つまり、ゼネは、(文書館では同じ箱に隣り合って保管されていたはずの) 1Aおよび4の用紙の存在を認識していなかった可能性がある。

その上で、この文書に関する彼のコメントを聞こう。彼は、まず、文書の年代の上限として、アゴベルトゥスの前任シャルトル司教の最後の言及である、1048年4月17日付け王文書の存在、およびこの文書の下署者の一人である、ラン司教リエトリの前任者ゲブレイヌスが廃された1049年10月という日付をあげる。かりに王のモノグランマの付加が司教文書作成と同時にあれば、それはおそらくここに下署している新しいラン司教の登位以後だが、司教文書の作成と王の確認との間に時間差があれば、前者の日付も無視できないことになる。ゼネは、日付の上限としては、前者の1048年10月をあげ、下限については、同じくラン司教の後継者ヘリナンドゥスの最初の明確な言及である1053年6月9日を提示する。さらに、ゼネは、この文書に下署した司教が、すべてランス大司教管区の司教であり、その他の人物のなかにもこの地方の人間が見えることから、王による文書の確認は、ランス大司教管区のどこか、おそらくランスで行われたものと推測する。

最後に、20世紀末に、現在のフランス共和国に残る1121年以前のすべて文書オリジナルの調査を行った、中世テキスト研究所（旧ナンシー大学付属）のカタログでは、1Aと1Bのみが調査の対象とされ、4は無視されている。おそらく、4は1Aの単なるコピーとみなされたからであろう。しかし、1Aと1Bについて、双方のテキスト上の違いは認識されているにも関わらず、1Aをオリジナル、1Bをコピーとする奇妙な判断が下されている⁽¹⁵⁾。

2. 第三者発給の文書に付された王のモノグランマ

シャルトル司教文書の伝来状況について説明したところで、今度は、この文書が提起する二つの問題について、研究の現状を検討しよう。

第一の問題は、第三者の文書に王のモノグランマ、つまり通常は王文書における王の署名として付される記号が描かれる問題である。

この問題を体系的なかたちでは初めて取り上げたブルーは、フィリップ1世王文書集の序論で、以下のように述べる。王が、王印璽、下署、十字架、あるいはモノグランマなどの手段によって確認した第三者発給の文書、あるいはノティティアの用例は、すでに即位前のユグ・カペー文書にみられ、その後特に、アンリ1世、フィリップ1世期にしばしば利用されたのち、ルイ6世期に消滅するという。その上で、これらの確認文書は、王文書に類するもの、つまり当該文書に対する侵害は、王の命令に対する侵害と同じ罰をもたらすものとみなすことができるとして、フィリップ1世文書集の中では、厳密な意味での王文書と区別することなく、一つの一連番号系列を構成するものとして並べている⁽¹⁶⁾。さらに、このような見解はすでに、13世紀半ばに実務の現場で確認できるとする。1238年ごろ、ラン教会で編纂されたカルチュレールにおいて、フランス王アンリ1世の下署と印璽を持つ司教文書を、他の王文書のなかに混ぜて転写しているのが確認される⁽¹⁷⁾。このような手続きが採用された理由としてさまざまな状況が考えられる。獣皮紙や文書局経費の節約、文書作成が要求されたときに、たまたま文書局スタッフがいなかったなどである。フィリッ

プ1世については、用例のすべては教会への寄進を内容とするが、だからといってこの行為には必ず王の確認が必要であったわけではない。王の確認は、すでに効力を有している文書に、王の保証を与えるだけのものであるとされる⁽¹⁸⁾。

他方、フランス王文書形式学の標準的教科書の中で、テシエは、基本的にプルーの見解を紹介しつつ、このような手続きの大半は11世紀の用例であり、文書形式の墮落と見なしうるとする。ちなみに、フランス王に関する資料上確認される最後の例は、1110年のルイ6世の行為である⁽¹⁹⁾。

このような古典的見解に対して、最近になって異議を申し立てたのが、国立文書学校におけるプルーやテシエの後継者であるギョジャンンであった。彼自身、初期カペー王の王文書刊行シリーズにおいて、10世紀から11世紀の3人の王の文書刊行事業を担当しており、彼の議論はその準備作業を反映している⁽²⁰⁾。

ギョジャンンは、まず初期カペー王文書について、従来、二種類の「墮落」が語られてきたとする。一つは、王文書形式のそれで、文書数自体が減少するとともに、形式が壊れたことは、文書局自体の機能が低下したとみなされてきた。いま一つは、これと連動して、この時期の王権、つまり公権力、および文字の力自体が衰えたと考えられたことである。この見方に対して、ギョジャンンは、11世紀の王文書形式や王権は墮落したのではなく、この時代の複雑な変容に、独自の論理で適応したのだと主張する。

まず文書数について、ロベール2世、アンリ1世、フィリップ1世3代のカペー王をそれぞれ見ると、1年あたりの文書発給数はほとんど変化がないことがわかる。他方、その内訳を見ると、現在失われたことが確認される文書が相当数存在するほか、注目すべきことには、第三者の文書あるいはノティティアの確認行為が、特にアンリ1世からフィリップ1世紀には、伝来する王文書数に匹敵する量、存在する。文書発給状自体については、たとえばカロリング末期の王たちや、同時期のノルマンディ候ギョームと比較しても、特に1年あたりの文書発給数が少ない訳ではなく、第三者の文書の確認については、同時期のノルマンディ候も同じ傾向を呈していることがわかる（表1参照）。つまり、

11世紀のカペー王権の文書発給が、これ以前の時期の王文書（カロリング末期の諸王）、あるいは同時期の強大な領邦君主文書と比べて、特に衰退していた訳ではないのである。他方で、王文書の内容類型は、11世紀を通じて、王の保護が減り、譲渡が増えるほか、確認については、次第に第三者の文書の確認の形式をとるものが増加する。受益者の地理的範囲も、北フランスへの収束傾向が顕著で、王文書形式のいわゆる私文書化と合わせて、王文書の特権的な性格が薄まることは事実であるが。

表 1：11世紀のフランス王の文書発給数と類型（年間平均発給数）

ロベール 2 世	1,8 通	減失 2,1 通	第三者発給 0,4 通 (18%)	全 2,5 通
アンリ 1 世	1,7 通	減失 2,1 通	第三者発給 1,6 通 (49%)	全 3,7 通
フィリップ 1 世	0,9 通	減失 2,7 通	第三者発給 1,1 通 (55%)	全 3,7 通
ノルマンディ候 ギョーム			第三者発給 通 2,9 通	全 3,9 通

他方、この時期の文書について重要なのは、従来の文書局作成に加えて、受益者が物理的に準備する文書が増えることである。興味深いのは、実際に王文書を用意し得た受益者は、多くの王文書をすでに入手していた特定の有力修道院が大半で、そこではむしろアルカイックなカロリングの王権理念が維持されたのに対して、王文書局は、特に11世紀後半以降、統治の現実に即した新たな文書形式の類型を発展させたという指摘である。ギョジャンは、以上から、11世紀のフランス王文書という場は、王権理念と統治の現実の双方が変容するなか、さまざまな力が複雑に働く実験場の観を呈しており、その個別の特徴を、墮落や混乱として斬って捨てるのではなく、興味深い努力の現れとして吟味することが求められているとする。

3. altare 譲渡司教文書とパリ司教座教会

もう一つの問題は、この文書の内容である、司教による altare 譲渡である。この問題に関しては、私自身のパリ司教についての研究⁽²¹⁾をまとめるかたち

で、論点を整理しよう。

紀元千年頃の北フランスに、特に小教区教会に関する権益、権限を、誰でも所有可能な *ecclesia* と、教会にのみ属し、管区司教に監督権がある *altare* へ分割する法理が提起された。直接には、オルレアン司教とフルリ修道院との間の紛争に端を発したもののだが、当初は、司教の司教区監督権限と、修道院の小教区所有を正当化する裁判権特権を整合的に処理する法理として機能したと思われる。事実、10世紀末から12世紀初めの北フランスの司教文書の多くは、修道院をはじめとする教会機関への *altare* 譲渡、つまり小教区の管理責任の委任をその内容とするものであった⁽²²⁾。そこでは、たとえばある教会、修道院が、所領とともに小教区教会の寄進を受けるか、あるいはその確認を欲した場合には、寄進行為とは別に、当該教会が所在する管区司教が、受益者に *altare* を別途譲渡する例が見られた。パリ司教座教会に関しては、10世紀末から、司教座参事会が固有の所領網を形成する過程で、パリ司教からは所領と小教区、この場合には *ecclesia* と *altare* の両方の譲渡を受け一方で⁽²³⁾、パリ司教区以外に所在する小教区教会については、関係の管区司教から、*altare* のみの譲渡を別途受けている⁽²⁴⁾。そして、このシャルトル司教文書も、サンス、モー司教とならぶ、その例の一つなのである。

ところで、パリ司教による *altare* 譲渡文書のなかには、同じくフランス王アンリ1世のモノグランマが付加された、サン＝ジェルマン＝デ＝ブレ修道院のための文書がある⁽²⁵⁾。そこには、伯他多数の証人が記載されており、なんらかの集会の際に行われた法行為であることが示唆されるが、このような言及は、他の *altare* 譲渡司教文書にも散見される⁽²⁶⁾。他方、少なくともパリ司教文書の文書形式学的分析によれば、パリ司教による *altare* 譲渡文書は、文書形式上顕著な特徴を共有しており、これらは基本的にパリ司教側で作成されたことが想定される。逆に、パリ司教座教会参事会が受益者として *altare* を譲渡された他の司教座の司教文書の形式はそれぞれ異なることから、これらの司教文書は、それぞれ発給者の司教側で用意されたものと考えられる⁽²⁷⁾。

以上を念頭におくとき、この王のモノグランマが付加されたシャルトル司教文書は、11世紀のaltare譲渡の司教文書として、まさにそうあるべきあり方で現れていると考えることができる。他方、11世紀の王文書は、カロリング期や12世紀以後とは異なり、当該法行為に（おそらくは）直接立ち会った聖俗の多くの者たちの下署を備えている。王のモノグランマを有するシャルトル司教文書に記載されている多くの下署者たちの何人かは、同時期のシャルトル教会のための王文書にも姿を現しており、この面からもこの文書の真正性を疑うことはできない⁽²⁸⁾。この文書が例外なのは、同じ内容の文書が、文言と証人を異にする三つの単葉の用紙で伝わっていることである。最後に、この文書の発給と伝来過程について、考えてみよう。

4. シャルトル司教アゴベルトゥス文書の発給、伝来過程

この文書は、すでに見たように、文書的な体裁を持つ二つの大きな縦長の支持体に書かれた用紙と、横長の用紙に書物の書体で書かれながら、王のモノグランマを持つ一つの用紙によって伝来する。そして、この二種類は、特に証人欄の構成が顕著に異なる。

この司教文書で採用されている文書書式は、パリ司教座教会に類例がないもので、おそらく間違いなくシャルトル司教側で本来準備されたと考えられる⁽²⁹⁾。そして、それがまず作成されたのは、文書系の2つの用紙（1Aおよび4）のかたちであったろうことは容易に予測できる。繰り返すが、文書の体裁と書体を有する二つの用紙には、司教アゴベルトゥス以下、シャルトル教会の聖職者とおぼしき人物がもっぱら列挙されているが、王の確認を持つ用紙（1B）には、シャルトル司教自身の言及がないばかりか、文書系二つの用紙には見えない人物が大量に記載されているのである。ゼンの指摘にあるように、その中にはランス大司教をはじめとする、ランス大司教管区の司教たち、王の弟、プロワ伯他の有力諸侯、領主たちが見え、この事実から、王の確認を受けた文書のこのヴァージョン（1B）は、おそらくはランス大司教管区のどこかで、王が招集したなんらかの集会の際に、作成されたものと推測すること

が確かに可能である。残念ながら、この集会在、どこでいつ開かれていたのを明確にすることができないが、この文書には、同時期の王文書に下署した王の集会への出席者、あるいは側近たちの何人かが姿を現している⁽³⁰⁾。

以上の状況から推測できるのは、パリ司教座教会の聖職者たちは、シャルトル司教から *altare* 文書の発給を受けたのち、なんらかの理由で、この文書を横長の用紙に書物の書体で転写して、ランス大司教管区のどこかで開かれていた王の集会に持ち込み、そこで王のモノグランマの付加を受けたということである。1067年ごろのサン＝カンタンのノティスが示すように、パリ司教座参事会は、聖俗諸侯が参集する集会をとらえて自らの権益を主張し、さらに文書を作成することがあった⁽³¹⁾。この点で興味深い状況が、つい最近マルムチエ修道院についても指摘された。ガス＝グランジャンによれば、この修道院を受益者とする1060年のシャルトル司教アゴベルトゥス文書には、フランス王フィリップ1世のモノグランマと、ここでは王印璽までもが付されたオリジナルが伝来する。重要なのは、この司教文書には、現在は失われているが、かつてもう一通の用紙も存在した痕跡があるという指摘である⁽³²⁾。

ところで、ここで、文書系用紙がなぜ二つあるのかについても、検討しておかねばならない。実は、パリ司教座教会は、カロリング王文書を初めとして、12世紀初めまでに、彼らが受給した重要な文書や、パリ司教発給文書のいくつかについて、単葉のコピーを、場合によっては複数作成していたのである(表2)。かつては図像再現的コピー *copie figurée* などと呼ばれ、研究者によっては、文書の下書きともみなされていたこれらの用紙について、最近、モレルは、これらはむしろ、受給者側でのアーカイブズ管理の努力の一環との説を提示している⁽³³⁾。そして、少なくともパリ司教座教会関連文書については、伝来状況から見て、これらのほとんどすべてがパリ司教座教会側で、11世紀末から12世紀初めに作成されたものと見なしうるのである⁽³⁴⁾。このシャルトル司教文書については、パリ司教座教会は、シャルトル司教から得た本来のオリジナルとは別に、王のモノグランマを要求する用紙(1B)に加えて、シャルトル司教側が準備した文書の体裁をなぞる用紙(4)を、あらたに作成したこ

とになる。

表2：パリ司教座教会関連で伝来する単葉の文書用紙

年代	発給者	オリジナル	単葉のコピー	偽文書
528	Childebert Ier			Arch.nat., K 1, no 1
[0774-800]	Charlemagne		Arch.nat., K 7, no 13b	Arch.nat., K 7, nos 13(a)
811	Etienne, comte de Paris		Arch.nat., S 388, no 1, 2a et 2b	
814	Louis le Pieux	Arch.nat., K 8, no 1a	Arch.nat., K 8, no 1b et 1bis	
820	Louis le Pieux			Arch.nat., K 8, no 9
851	Charles le Chauve	Arch.nat., K 12, no 1a	K 12, no 1b, 1c et 1	
867	Charles le Chauve	Arch.nat., K 14, no 2(2)	Arch.nat., S 231, no 3	
868	Charles le Chauve		Arch.nat., K 14, no 5	
872	Charles le Chauve	Arch.nat., K 11, no 4a	Arch.nat., K 11, no 4b	
907	Charles le Simple		Arch.nat., K 16, no 6a et 6b	
911	Charles le Simple	Arch.nat., K 16, no 7a	Arch.nat., K 16, no 7b	
980	Benoit VII			Arch.nat., L 220, no 5
[0986- 979]	Lothaire et Louis V	Arch.nat., K 17, no 5a	Arch.nat., K 17, no 5b	
995	Renaud, ev.Paris	Arch.nat. K 18A, no 1(4a)	Arch.nat., K 18A, no 1(4b)	
1006	Renaud, ev.Paris (Jean)	Arch.nat., S 305B, no 1	Arch.nat., S 302a, no 4	
1006	Renaud, ev.Paris (Jean)			Arch.nat., L 463, no 1
[1055c]	Agobert, ev.Chartres	Arch.nat., S 254, no 1A	Arch.nat., S 254, no 1B et 4	
1094	Geoffroi, ev.Paris	Arch.nat., K 20B, no 6(11)	Arch.nat., L 920, no 1	
[1102c]	Etienne, comte Blois	Arch.nat., K 20, no 6(22)	Arch.nat., S 371B, s.n.	
1105	Galon, ev.Paris	Arch.nat., K 20B, no 7(6)	Arch.nat., K 20B, no 7(6b)	
1108	Galon, ev.Paris	Arch.nat., K 21A, no 1(3)	Arch.nat., L 463, no 3	
[1112-1117]	Louis VI	Arch.nat., K 21B, no 7a	Arch.nat., K 21, no 7b	
1115	Lambert, ev.Noyon	Arch.nat., S 435, s.n.	Arch.nat., S 435, s.n.	
1143	Louis VII	Arch.nat., K 23, no 7a	Arch.nat., K 23, no 7b	

かつて別稿で指摘したように、12世紀初めに、パリ司教座教会最初のカルチュレルが参事会のイニシアティブで作成されたとき、この文書の転写対象

となったのは、現在伝来している単葉の用紙であった⁽³⁵⁾。本稿が対象としているシャルトル司教文書について、このカルチュレールの編纂者が転写対象としたのは、証人欄の構成から、この文書系用紙であることに疑いはない⁽³⁶⁾。11世紀のパリの聖職者たちは、シャルトル司教が発給してくれた真正な文書に加えて、わざわざ王のモノグランマ付き文書を準備したにもかかわらず、半世紀後のカルチュレール編纂にあたって、採録の対象とされたのは、王のモノグランマがないヴァージョンであった。いわば、王の確認を求めた半世紀前の前任者たちの努力は、後任の参事会員たちによって無視されたのである。カルチュレールの編纂者は、なぜ、王のモノグランマが記載された用紙ではなく、こちらの用紙を転写したのであろうか。

私の仮説は、以下のようなものである。11世紀半ばのaltare譲渡司教文書は、パリであれシャルトルであれ、文書の体裁を色濃く示す外観と形式で、基本的には発給者の文書局において発給された。それは、この行為が、カロリング的理念の延長線上で、司教の公権力を象徴する政策的意味を持っていたからである⁽³⁷⁾。しかしながら、パリ司教座参事会は、受益者として受け取ったこのシャルトル司教文書について別の用紙を作成し、そこに王の確認を得た。問題なのは、その際、パリ司教座参事会は、文書の体裁の定式性を強く維持することに関心を寄せなかったことである。おそらく、そこでは下署者からなる証人や王の介入が物理的に刻印されることが決定的に重要であったからであろう。事実、11世紀半ばは、文書の定式性維持の要件が「ゆるんだ」時期とみなされ、この特徴は王文書のみならずパリ司教文書にも見いだされる。外的体裁について配慮がないばかりか、裏面まで使用している特異例すらあるのである⁽³⁸⁾。ところで、12世紀初めには状況は変わっていたように思われる。ここでは、文書の有効性を保証する際に要求されたのは、文書作成のコンテキスト（たとえば、王による確認）の記憶を保存することではなく、文書の形式それ自体であった。つまり、本稿が対象とするaltare譲渡司教文書がそのような、定式性が高い権威の文書に対して、12世紀初めの段階で要求されたのは、縦長の大きな用紙に、十分な行間を保って明確に文書の書体で書かれ

た「外層的」諸特徴ではなかったかということである。文書系用紙のコピーは(4)、11世紀末から12世紀初めにかけて、文書の形式的価値が高まり、アーカイブズ管理の必要性が切実になってきたとき、おそらくはカルチュレール編纂に先立つ事業として、作成されたものと推測される⁽³⁹⁾。

おわりに

本稿では、11世紀のある司教文書について検討した。そこでは、ギョジャンやバルテルミにならって、11世紀の封建社会において、文書の価値や法的秩序は、混乱、墮落したのではなく、その時々環境に「適応」したとする見方を採用した上で、12世紀初頭には、文書が持ち得た効力の根拠は、再度特に外層的諸特徴に重心を置く「形式」に復帰しつつあったのではないかという仮説を提出した。このような結論を導き出す上で、本稿が検討の対象とした、パリ司教座教会のためのシャルトル司教文書は、特別に貴重な情報を与えてくれる特異例といえる。なぜなら、この文書は、11世紀中葉から12世紀初めまでの間に作成されたことが確実な三つの単葉の用紙とカルチュレールによって伝来し、かつそれぞれの生成、転写の際に採用された文書形式上の「判断」が異なるからである。文書研究は、究極のオリジナルの確定ばかりではなく、伝来するそれぞれのヴァージョン成立のコンテキスト、プロセスの研究でもありえるのである。

注

- (1) MORELLE, L., La main du roi et le nom de Dieu: la validation de l'acte royal selon Hincmar, d'après un passage de son *De divortio*, dans J. HOAREAU-DODINAU et P. TEXIER, éd., *Foi chrétienne et églises dans la société politique de l'Occident du Haut Moyen Age (IV^e-XII^e siècles)*, Limoges, 2004, p. 287.
- (2) GUYOTJEANNIN, O., MORELLE, L. et PARISSÉ, M., éd., *Pratiques de l'écrit documentaire au XI^e siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des chartes, 1997)*, Paris, 1997; MORELLE, L., Instrumentation et travail de l'acte : quelques réflexions sur l'écrit diplomatique en milieu monastique au XI^e siècle, dans *Médiévales*, 56, 2009, pp. 41-74.
- (3) 前注2に加えて、以下の文献も参照のこと。MORELLE, L., Histoire et archives vers l'an mil:

- Une nouvelle «mutation»? , dans *Histoire et Archives*, 3, 1998, pp.119-141; ZIMMERMANN, M., *Ecrire en l'An Mil*, dans P. BONNASSIE et P. TOUBERT, éd., *Hommes et Sociétés dans l'Europe de l'An Mil*, Toulouse, 2004, pp.351-378. 岡崎敦「11世紀北フランスに文書史料の危機はあったかーパリ司教座教会の場合ー」『西洋史学論集』37, 1999年, 1-21頁。
- (4) この点については、「紀元千年論争」および、フランス学界に関するバルテルミの諸見解を参照。BARTHELEMY, D., *La mutation féodale a-t-elle eu lieu?* (note critique), dans *Annales Economies, Société, Civilisations*, 1992, pp.767-77; BISSON, T. N., *The "Feudal Revolution"*, in *Past and present*, 142, 1994, pp.6-42; POLY, J.-P. et BOURNAZEL, E., *Que faut-il préférer au «mutationnisme»? ou le problème du changement social*, dans *Revue historique du droit français et étranger*, 72, 1994, pp.401-12; REYNOLDS, S., *Fiefs and Vassals. The Medieval Evidence Reinterpreted*, Oxford, 1994.; BARTHELEMY, D., *Encore le débat sur l'an mil*, dans *Revue historique du droit français et étranger*, 73, 1995, pp.349-60; BARTHELEMY, D., *Debate. The "Feudal Revolution". I*, in *Past and Present*, 152, 1996, pp.196-205; WHITE, S. D., *Debate. The "Feudal Revolution". II*, in *Past and Present*, 152, 1996, pp.205-223; BARTHELEMY, D., *La théorie féodale à l'épreuve de l'anthropologie* (note critique), dans *Annales H.S.S.*, 1997, pp. 321-341; BARTHELEMY, D., *L'an mil et la paix de Dieu. La France chrétienne et féodale, 980-1060*, Paris, 1999; BOURIN, M. et ROSENWEIN, B. H., éd., *L'an mil en 2000 (no 37 de Médiévales, 1999)*, Paris, 1999; LAURANSON-ROSAZ, C., *En France: le débat sur la "mutation féodale". État de la question*, dans *Scienza & Politica*, 26, 2002, pp.3-24; BARTHELEMY, D., *Le vingtième siècle et la société féodale*, dans *Cahiers de civilisation médiévale*, 48, 2005, pp. 105-110; BARTHELEMY, D., *La mutation de l'an 1100*, dans *Journal des savants*, Année 2005, vol. 1, 2005, pp.3-28; BARTHELEMY, D., *Nouvelle histoire des Capétiens. 927-1214*, Paris, 2012. さらに、ブショロンによる研究史回顧、および若い世代の代表的研究者であるマゼルの発言も重要である。BOUCHERON, P., *An mil et féodalisme*, dans C. DELACROIX, F. DOSSE, P. GARCIA et N. OFFENSTADT, éd., *Historiographies, II. Concepts et débats*, Paris, 2010, pp.952-966; MAZEL, F., *Féodalités : 888-1180*, Paris, 2010; MAZEL, F., *Justice, société et pouvoir à l'époque féodale : nouvelles perspectives*, dans *Revue historique*, 662, 2012, pp. 477-491.
- (5) 稿末の史料テキストを参照のこと。この内、13世紀のカルチュレールは、12世紀のカルチュレールの転写なので、ここでの考察からは除外する。
- (6) 中央文書館のS系列に納められているパリ司教座参事会関連の資料群については、以下のカタログを参照。LE ROCH' H-MORGERE, M. et RINBENET-PRIVAT, M., *Le temporel du chapitre de Notre-Dame de Paris et de ses filles. S 1(A) à S 942. Inventaire*, Paris, 1990, 当該箇所は、pp. 78-79. ここでは、この日付のないシャルトル司教文書は無視されるかたちで、収納文書の年代の上限は1190年となっているが、もちろん誤りである。
- (7) パリ司教座教会のカルチュレールについては、以下の拙稿を参照。岡崎敦「西欧中世における記憶の管理とアーカイヴズーパリ司教座教会のあるカルチュレールをめ

ぐって (Liber Niger) — 『史淵』 146、2009年、62-69頁。後に述べるように、12世紀初めに、パリ司教座教会ではじめて編集された Liber Niger というカルチュレールは、13世紀作成のものとは異なり、単葉の用紙の一つを転写したものである。

- (8) アゴバルトゥスについては、とりあえず、*Gallia christiana*, VIII, col. 1119-1120 を参照。
- (9) この時期のフランスの司教印章については、とりあえず、以下のものを参照。
BRUNEL, G., Chartres et chancelleries épiscopales du Nord de la France au XIe siècle, dans M. Parisse, éd., *A propos des actes d'évêques. Hommages à L. Fossier*, Nancy, 1991, pp. 227-44; BAUTIER, R.-H., Apparition, diffusion et évolution typologique du sceau épiscopal au Moyen Age, in C. HAIDACHER und W. KOFLER, hrsg., *Die Diplomatie der Bischofsurkunde vor 1250/La diplomatie épiscopale avant 1250. Referate zum VIII. Internationalen Kongress für Diplomatie, Innsbruck, 27. September - 3. Oktober 1993*, Innsbruck, 1995, pp. 225-241; CHASSEL, J.-L., L'essor du sceau au XIe siècle, dans *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des chartes, 1997)*, 1997, pp. 221-234. パリ司教文書についても、印章が現れるのは1080年代後半以降である。岡崎敦「パリ司教の印璽(11-12世紀) —ピエール・ロンバルの第二印璽を巡って—」『西洋史研究』新輯24、1995年、45-81頁。
- (10) この時期の文書全般、さらには文書形式学上の知見については、以下の文献を参照。
GUYOTJEANNIN, O., PYCKE, J. et TOCK, B.-M., *Diplomatie médiévale*, Turnhout, 1993, en particulier, pp. 65-66.
- (11) loc. cit.
- (12) Liber Niger については、以下の前掲拙稿を参照。岡崎敦「西欧中世における記憶の管理とアーカイヴズ」
- (13) GUERARD, B., éd., *Cartulaire de Notre-Dame de Paris*, Paris, 1850, I, pp.318-319
- (14) SOEHNEE, F., *Catalogue des actes de Henri Ier, roi de France (1031-1060)*, Paris, 1907, no 86, pp. 89-91.
- (15) TOCK, B.-M., éd., *La diplomatie française du Haut Moyen Age. Inventaire des chartes originales antérieures à 1121 conservées en France, t. I. Introduction générale, Album diplomatique, Table chronologique, Table des auteurs, t. II. Table des destinataires, Table des genres diplomatiques, Table des états de la tradition manuscrite, Table des sceaux, Table des chirographes, Table des cotes d'archives ou de bibliothèques*, Turnhout, 2001, nos 2903 (A1=1a) et 2904 (A2=1b). 旧ナンシー大学中世テキスト研究所 Atelier de recherche sur les textes médiévaux (ARTEM) の活動は、現在ロレーヌ大学歴史研究所、歴史テキスト研究所などに分割されているが、現フランス共和国内に伝来する1121年以前のオリジナル文書調査は、歴史テキスト研究所 L'Institut de recherche et d'histoire des textes (IRHT) の「手書き資料およびアーカイブズの情報化 Traitement électronique des manuscrits et des archives (TELMA)」プロジェクトサイトのなかで、その成果を閲覧することができる。ここでも、このサイトで公開されている情報を参照した。« Charte Artem/CMJS n°2903 » [En ligne]

- <http://www.cn-telma.fr/originaux/charte2903/> et « Charte Artem/CMJS n°2904 » [En ligne] <http://www.cn-telma.fr/originaux/charte2904/>.
- (16) PROU, M., éd., *Recueil des actes de Philippe Ier, roi de France*, Paris, 1908, Introduction, pp. CLXXVIII-CLXXX.
- (17) cf. Bouxin, A., Un cartulaire du chapitre de la cathédrale de Laon (XIIIe s.), dans *Revue des bibliothèques*, 11e année, 1901, p.1.
- (18) PROU, *Recueil des actes de Philippe Ier*, pp. CLXXVIII-CCIV. ブルーの検討は、さらに、前任の王たちの文書の確認、マルムチエ修道院関係資料が提起する諸問題、王の確認を表現する書式、偽文書、文書中での王の口頭の同意の言及などの各論を含んでいる。
- (19) TESSIER, G., *Diplomatique royale française*, Paris, 1962, pp. 227-228.
- (20) GUYOTJEANNIN, O., Les actes de Henri Ier et la chancellerie royale dans les années 1020-1060, dans *Journal des Savants*, 1988, pp. 81-97; GUYOTJEANNIN, O., Les actes établis par la chancellerie royale sous Philippe Ier, dans *Bibliothèque de l'Ecole des chartes*, 147, 1989, pp. 29-4; GUYOTJEANNIN, O., Actes royaux français. Les actes des trois premiers Capétiens (987-1060), dans J. BISTRICKY, hrsg., *Typologie der Königsurkunden. Kolloquium de Commission Internationale de Diplomatique in Olmütz, 30.8 - 3.9. 1992*, Olmütz, 1998, pp. 43-63. 本稿との関係で特に重要なのは、アンリ1世文書に関する論文である。日本語では、岡崎敦「初期カペー王の文書 - 統治と文書形式」、『西欧中世比較史料論研究 平成18年度年次活動報告書』、2007年3月、59-64頁。
- (21) 岡崎敦「パリ司教と altare (10-12世紀)」『文芸と思想』53、1989年、69-87頁；岡崎敦「中世盛期パリ地方における修道院の小教区所有と司教裁治権」『史学雑誌』104編7号、1995年、37-73頁。
- (22) パリ以外の司教文書における altare 譲渡については、前注に記した私の研究の出発点となったルマリニエの一連の研究のほか、以下のような研究がある。LEMARIGNIER, J.-F., *Etude sur les privilèges d'exemption et de juridiction ecclésiastique des abbayes normandes depuis les origines jusqu'en 1140*, Paris, 1937; LEMARIGNIER, J.-F., L'exemption monastique et les origines de la réforme grégorienne, dans *A Cluny. Congrès scientifique*, Dijon, 1950, pp.288-340; LEMARIGNIER, J.-F., Structures monastiques et structures politiques dans la France de la fin du Xe et des débuts du XIe siècle, dans *Il monachesimo nell'alto medioevo e la formazione della civiltà occidentale*, Spoleto, 1957, pp. 357-400; LEMARIGNIER, J.-F., Les institutions ecclésiastiques de la France de la fin du Xe au milieu du XIIe siècle, dans R. FAWTIER et F. LOT, éd., *Histoire des institutions françaises au moyen âge, t. III: Institutions ecclésiastiques*, Paris, 1962, pp. 3-139; LEMARIGNIER, J.-F., Le monachisme et l'encadrement religieux des campagnes du royaume de France situées au nord de la Loire, de la fin du Xe à la fin du XIe siècle, dans *Le Istituzioni ecclesiastiche della «societas christiana» dei secoli XI-XII, diocesi, pievi e parrocchie. Atti della sesta settimana internazionale di studio, 1974*, Milano, 1977, pp.357-405; DUVOSQUEL, J.-M., Les chartes de donation d'autels émanant des évêques

de Cambrai aux XIe-XIIe siècles éclairées par les obitulaires. A propos d'un usage grégorien de la chancellerie épiscopale, dans H. Hasquin, éd., *Hommages à la Wallonie. Mélanges d'histoire, de littérature et de philologie wallonnes offerts à Maurice A. Arnould et Pierre Ruelle*, Bruxelles, 1981, pp. 147-63; LOHRMANN, D., Donation d'autels et service de l'ost à Noyon au XIe siècle, dans J. HOAREAU-DODINAU et P. TEXIER, éd., *Foi chrétienne et églises dans la société politique de l'Occident du Haut Moyen Age (Ive-XIe siècles)*, Limoges, 2004, pp. 133-148; TOCK, B.-M., Altare dans les chartes françaises antérieures à 1121, dans J. HAMASSE, éd., *Roma, magistra mundi. Itineraria culturae medievalis. Mélanges offerts au Père L.E. Boyle à l'occasion de son 75e anniversaire*, Louvain-la-Neuve, 1998, pp. 901-926; MAZEL, F., Amitié et rupture de l'amitié. Moines et grands laïcs provençaux au temps de la crise grégorienne (milieu XIe - milieu XIIe siècle), dans *Revue historique*, 633, 2005, pp. 53-95; FOULON, J.-H., *Église et réforme au Moyen Âge : papauté, milieux réformateurs et ecclésiologie dans les Pays de la Loire au tournant des XIe-XIIe siècles*, Bruxelles, 2008, pp.57-64.

- (23) 979/986, Lothaire et Louis V, rois de France, Arch.nat., K 17, no 5a, HALPHEN, L. et LOT, F., éd., *Recueil des actes de Lothaire et de Louis V, rois de France (954-987)*, Paris, 1908, no 236. この王文書については、以下の拙稿も参考のこと。岡崎敦「中世バリ司教座教会における「偽」文書作成（11-12世紀） —ベネディクトゥス7世教皇文書の再検討—」『史淵』153、2016年、59-86頁。
- (24) ao 1005, Lietry, archevêque de Sens, Arch.nat., K 18, no 2(8), TARDIF, J., éd., *Monuments historiques*, Paris, 1866, no 246; ao 1011, Macaire, évêque de Meaux, Arch.nat., K 18, no 9(2), GUERARD, *Cartulaire de Notre-Dame de Paris*, I, p. 321; ao 1032/49, Hilduin, archevêque de Sens, Arch.nat., K 19, no 2(7), GUERARD, *Cartulaire de Notre-Dame de Paris*, I, p. 320.
- (25) 1042/43, Imbert, évêque de Paris, Arch.nat., K 19, 2(4), POUPARDIN, R., éd., *Recueil des chartes de l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés*, Paris, 1909/13, no 56.
- (26) cf. BOUSSARD, J. et BAUDOT, M., éd., *Recueil des chartes de l'abbaye de Saint-Maur-des-Fossés* (inédit), nos 52, 54 (991/1007), 55 (991/1016), 60 (1006) et 63 (1006/1009); DE LASTEYRIE, R., éd., *Cartulaire général de Paris*, Paris, 1877, no 76 (1006); POUPARDIN, *Recueil des chartes de l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés*, no 58 (1045).
- (27) 以下の私の未刊行の博士論文で体系的に論じた。岡崎敦『中世バリ司教座教会における文書実践 制度・史料論的研究（9-12世紀）』（博士（文学）、熊本大学、2015年3月。方法論と暫定的な成果については、以下の論文を参照。岡崎敦「バリ司教座教会の文書局（9-12世紀）」『史淵』123輯、1986年、39-76頁。
- (28) アンリ1世の文書には、批判的な刊本がないが、19世紀までに刊行された種々の史料集所収のものについてはテキストが参照可能である。また、前記のゼネの文書目録や歴史テキスト研究所のオリジナル調査事業は、貴重な情報と意見をもたらしてくれる。今回、ゼネの指摘を受けるかたちで、アンリ1世の全文書の下署者のチェックを行った。この結果、少なくとも以下の文書において、アゴバルトゥス文書の二つのヴァージョン

- 双方、あるいはどちらかに現れる下署者を複数確認することができる。SOHNEE, *Henri Ier*, nos 79 (ao 1048), 112 (ao 1058); MARTENE, Ed. et DURAND, U., *Veterum scriptorum et monumentorum historicorum, dogmaticorum, moralium amplissima collectio*, 9 vol., Paris, 1724-1733, t. 7, col. 58-59 (ao 1048); PROU, *Recueil des actes de Philippe Ier*, no 2 (ao 1060). 最後の例は、アンリ1世文書のオリジナルに、フィリップ1世が確認の十字架を付したものである（ゼネのカタログから漏れている）。
- (29) パリ司教座教会が作成した文書の形式的特徴については、注27に挙げた拙稿を参照。シャルトル司教文書については、体系的な文書史料集も文書形式学的研究も存在しないため、1Aの作成主体や状況を特定することはできない。しかしながら、文書の作成は、この時期に特徴的な受益者によるものでなければ、発給者の側で行われたものとみなさざるをえない。
- (30) ランス大司教管区方面で発給されたこの王の他の文書の下署者を、この文書の下署者と比較検討することを試みたが、参照できた以下の2通においては、共通性は看守されなかった（SOHNEE, *Henri Ier*, nos 75 (ao 1047) et 108 (ao 1057)）。他方、北フランスにおいて、王の影響下で開催された教会会議の出席者を調査したところ、以下の3回の会議において、ここで問題としている王文書のヴァージョン（1B）の下署者が相当数確認された。1048年のサンスおよびサンリス教会会議、1049年のランス教会会議である。PONTAL, O., *Les conciles de la France capétienne jusqu'en 1215*, Paris, 1995, pp.116-7 (1048, Sens, Senlis), et pp. 154-159 (1049, Reims)。
- (31) Arch.nat., K 20A, no 3 (3)。この文書については、以下の拙稿を参照。岡崎敦「11世紀北フランスに文書史料の危機はあったか」、5-10頁。
- (32) GASSE-GRANDJEAN, M.-J., *Retour sur trois actes de Philippe Ier, roi de France*, dans *Bibliothèque de l'Ecole des chartes*, 158, 2000, pp. 536-540。
- (33) 全般的には、とりあえず、GIRY, A., *Manuel de diplomatique*, Paris, 1894, p. 12; GUTYOTJEANNIN, *Diplomatique*, p. 286。ロラン・モレル「<文書オリジナル>とはなにか —7-12世紀の文書史料に関するいくつかの指摘—」『史学』76-2/3, 2007年、89-120頁、特に97-99頁。
- (34) 岡崎敦『中世パリ司教座教会における文書実践 制度・史料論的研究（9-12世紀）』、133頁；岡崎敦「パリ司教座教会における文書実践の諸相（9世紀-12世紀始め）」、丹下栄編『カロリング期社会変革の基礎的研究。教会エリート、大所領』研究成果報告書、2015年3月、53-62頁。
- (35) 岡崎敦「西欧中世における記憶の管理とアーカイヴズ」、62-69頁。
- (36) カルチュレールの転写においては、証人の記載順序が、二つの文書系用紙のそれと異なるように見えるが、これは、前者が、証人欄の一部を、段ではなく行で読んでいるためである。Liber Niger, Arch.nat., LL 78, p. 87。なお、ゲラールによるパリ司教座教会カルチュレール刊本は、この文書については、13世紀の別のカルチュレールの採録だが、そこでも Liber Nigerと同様の読みが行われている。GUERARD, *Cartulaire*, I, p.319。

- (37) 前掲の岡崎「司教裁治権」論文を参照。
- (38) 1056年頃のバリ司教アンベール文書。Arch.nat., S 275, no 115. この文書については、前掲拙稿「11世紀北フランスに文書史料の危機はあったか」、11-12頁参照。
- (39) 4の作成年代は、書体の特徴から、おそらく12世紀初めと推測される。たとえば、1107年のバリ司教ガロン文書との間に、書体の類似性を確認することができる。Arch.nat., K 20, no 9 (2). 他方、1Bは、横長の体裁や書体、そしてなにより王のモノグランマの形態から、11世紀半ばの同時代作成とみなしうる。

付録1：史料テキスト

[1049 – 1053]

Agobert, évêque de Chartres, donne l'église d'Epône au chapitre cathédral de Paris.

A1. Original, 590/582 × 409/411, Arch.nat., S 254, no 1A (olim L 457, no 1a)

A2. Original, 233/230 × 326/320, Arch.nat., S 254, no 1B (olim L 457, no 1b)

A3. Copie du XIIe s., 590/600 × 425, Arch.nat., S 254, no 4 (olim L 457, no 4)

B. Copie du XIIe s., Livre noir, Arch.nat., LL 78, pp. 84–87, no XXXII; C. Copie du XIIIe s., Petit Pastoral, Arch.nat., LL 77, pp. 161–162.

a. GUERARD, B., éd., *Cartulaire de Notre-Dame de Paris*, Paris, 1850, I, pp.318–319 [c1055], no XI, d'après C; b. « Charte Artem/CMJS n°2903» [En ligne] <http://www.cn-telma.fr/originaux/charte2903/> et « Charte Artem/CMJS n°2904» [En ligne] <http://www.cn-telma.fr/originaux/charte2904/>.

ind.: SOEHNEE, F., *Catalogue des actes de Henri Ier, roi de France (1031-1060)*, Paris, 1907, no 86 (1049, octobre - 1053, 9 juin); TOCK, B.-M., éd., *La diplomatie française du Haut Moyen Age. Inventaire des chartes originales antérieures à 1121 conservées en France, t. I. Introduction générale, Album diplomatique, Table chronologique, Table des auteurs, t. II. Table des destinataires, Table des genres diplomatiques, Table des états de la tradition manuscrite, Table des sceaux, Table des chirographes, Table des cotes d'archives ou de bibliothèques*, Turnhout, 2001, nos 2903 (A1=1a) et 2904 (A2=1b); [c1055], no 2903 (A1=1a) original, 2904 (A2=1b) copie, no 4 manque.

Texte d'après A1.

[croix] IN NOMINE UNIUS ET INDIVIDUÆ TRINITATIS.

Cum in cupiditatis tyrannidē evertenda atque regno karitatis augendo laborandum sit omnibus qui veri corporis Christi quod cum eo in ęternum erit membra se esse appetunt; consilium est providere utilitati suę parvitatem nostram, quę in via quidem justicię nondum ambulat; sed ut ad eam perveniat indefesse desiderat; cum autem tres caritatis partes nemo fęre sit qui nesciat; primam scilicet quę agit aliquid ut sibi prosit, secundam quę ut alii, terciam vero ea facientem quę sibi simul et alii pro futura

cognoscit; duabus quidem prioribus aliqua sed ultimę maxima invigilandum est opera; quam ex utraque compositam utrique idem valere videmus quia vero karitati que Deus est humilitatem nostram placere speramus si caritatis opera faciamus; indignum est necessaria petentibus abundantes petita negare; atque eorum precibus aurem misericordię non prebere; cum ipse nos petere inperet; ac se promittat daturum; pulsare et se aperturum;

ego igitur AGOBERTUS Carnotensium episcopus Dei gratia ejus vestigiis inherere utile esse et honestum intelligens.

Parisiensium canonicorum et eorum presulis domni IMBERTI precibus aures exauditionis aperio; ut quos consulendę ecclesię nostrę hactenus Dei gratia et sua non defuisse sensimus; beneficio nostro quia digni sunt obligati a modo ingrati nusquam appareant; sed quod prius nullisque precedentibus meritis dabant jam debitores facti liberius exsolvant; Do ergo fratribus predictis in communi habendum altare Spedonensis ecclesię; ut numquam vel a me vel ab aliquo successorum meorum aliqua ejus redemptio exigatur; sed id teneant atque possideant sine alicujus repetitionis infestacione et calumpnia; solvere tamen inde sinodum ac circadam non negligant; ne res ecclesiastica omnino a manu episcopi remota videatur;

Si quis vero hoc donum quod bonum esse pauci nesciunt qui sciant quia quorum finis bonus est adnichilare ac destruere temptaverit; auctoritatis divinę et pusillitatis meę anathemate jure percussus; quia quod bonum est destruens; a nullo negatur esse malus; sciat se poenis affligendum infernalibus atque aeterno dampnandum incendio;

Ut autem hoc donum per succedentia tempora firmum et stabile permaneat; archidiaconi SYGONIS manibus roborandum obtuli cartulam; ceterisque ecclesię nostrę prefectis; quorum hec sunt nomina;

[colonne1] S. Landrici abbatis. S. Hugonis decani. S. Ernulfi cantor. S. Hildegarii subdecani. S. Rotberti subcantoris. S. Sygonis archidiaconi.

[colonne2] S. Fulcherii archidiaconi C[arnotensis]. S. Fulcherii archidiaconi D[unensis]. S. Ivonis prepositi. S. Gerogii prepositi. S. Guidonis prepositi. S. Ingelranni signatoris.

[colonne3] [croix] S. AGOBERTI PRESULIS. S. Guillelmi prepositi. S. Hugonis Carnotensis. S. Ascelini presbiteri. S. Huberti sacerdotis.

Et ne ab aliquo successorum meorum hoc donum evertatur, sciant fideles ecclesię hoc sibi me eo tenore dedisse ut illi et successores sui mihi meisque successoribus solvant unoquoque anno Parisius si requisierint [croix] C albos panes, duos modios boni vini Parisiacenses, quinque frisingas aut, si tempus fuerit, X arietes, gallinas XII, avenę modium unum Parisiensem.

Texte d'après A2

In nomine unius et individue Trinitatis.

Cum in cupiditatis tyrannide evertenda atque regno caritatis augendo laborandum sit omnibus qui

veri corporis Christi quod cum eo in æternum erit membra se esse appetunt consilium est providere utilitati suę parvitatem nostram quę in via quidem justicię nondum ambulat sed ut ad eam perveniat indesinenter desiderat; Cum autem esse tres caritatis partes nemo fere sit qui dubitet primam scilicet quae agit aliquid ut sibi prosit secundam quę ut alii terciam vero ea facientem quę sibi simul et alii pro futura cognoscit duabus quidem prioribus aliqua sed ultimę maxima invigilandum est opera, quam ex utraque compositam utriusque idem valere videmus; quia vero caritati quę Christus est humilitatem nostram placere speramus si caritatis opera faciamus indignum est necessaria petentibus abundantes petita negare, atque eorum precibus aurem misericordiae non prebere cum ipse nos petere imperet ac se promittat daturum, pulsare et se aperturum;

ego igitur Agobertus Carnotensium episcopus Dei gratia ejus vestigiis inherere utile esse et honestum intelligens

Parisiensium canonicorum et eorum presulis domni Imberti precibus aures exauditionis aperio ut quos consulendę aeccliesiae nostrae hactenus Dei gratia et sua non defuisse sensimus beneficio nostro quia digni sunt obligati amodo ingrati nusquam appareant sed quod prius nullisque precedentibus meritis dabant jam debitores facti liberius exsolvant; do ergo presuli et fratribus predictis in communi habendum altare Spedonensis aeccliesiae hoc modo ut nunquam vel a me vel ab aliquo successorum meorum aliqua ejus redemptio exigatur sed sine vicario ut ita dicam vel persona ab eis teneatur et ne res aeccliesiastica omnino remota a manu Carnotensis episcopi videatur sinodum inde ac circadam unoquoque anno solvere non negligant cum sibi me nichil aliud quam venditionem perdonasse intelligant.

Si quis vero hoc donum quod bonum esse pauci nesciunt qui sciant quia quorum finis bonus est ea etiam bona sunt si quis adnichilare ac destruere temptaverit auctoritatis divine ac pusillitatis meae anathemate jure percussus quia quod bonum est destruens malus esse videtur omnibus sciat se poenis affligendum infernalibus atque æterno dampnandum incendio.

Ut autem hoc donum permaneat neque ab aliquo successorum meorum evertatur sciant fideles aeccliesiae hoc sibi me ea lege dedisse ut illi et successores sui michi et omnibus Carnotensis aeccliesiae futuris episcopis solvant unoquoque anno Parisius centum albos panes duos modios boni vini Parisiacenses quinque frisingas aut si tempus fuerit decem arietes gallinas XIIcim, avenę modium unum Parisiacensem.

[colonne1] S. Landrici abbatis Sancti Petri. S. Ernulfi cantoris. S. Hildegarius subdecani. S. Hugonis prepositi. S. Ingelranni cancellarii. S. Widonis Calnei prepositi. S. Sigonis Haimonis filii. S. Fulcherii canonici. S. Walterii deb S. Widonis levite. S. Hugonis canonici Walteri prepositi.

[colonne2] S. Haldrici prepositi Sancti Carauni Huberti presbiteri. S. Warini levite, Roscelini presbiteri, Johannis medici, Georgii Herbranni, Odonis canonici, Odonis de Sancto Andree, S. Fulberti canonici. S. Magenfredi canonici. S. Hilduilli pueri canonici. S. Ernulfelli pueri canonici.

[colonne3] S. Ebrardi vicecomitis. S. Hugonis vicedomini. S. Gauslini casati. (Croix) S. Rotberti de Sancto Leodegario. S. Ebrardi Haimonis. S. Gausfridi dapiferi. Super

[*colonne4*] S. Widonis Remensis archiepiscopi. S. Leterici episcopi. S. Fulconis episcopi. S. Drogonis episcopi. S. Balduini episcopi. Signum regis Henrici [*monogramme*].

[*colonne5*] S. Odonis fratris regis. S. Tedbaldi comitis. S. Radulfi comitis. S. Manasę comitis. S. Waleranni Ivonis. S. [espace].

Texte de B.

In nomine unius et individue Trinitatis.

Cum in cupiditatis *tyrannide* (A2) evertenda atque regno *caritatis* (A2) augendo laborandum sit omnibus qui veri corporis Christi quod cum eo in æternum erit membra se esse appetunt consilium est providere utilitati sue parvitatem nostram que in via quidem justicie nondum ambulat sed ut ad eam perveniat *indefesse* (A1) desiderat; Cum autem *esse* (A2) tres caritatis partes nemo *ferre* (A2) sit *qui nesciat* (A1) primam scilicet que agit aliquid ut sibi prosit secundam que ut alii terciam vero ea facientem que sibi simul et alii pro futura cognoscit duabus quidem prioribus aliqua sed ultime maxima invigilandum est opera, quam ex utraque compositam utriusque idem valere videmus; quia vero *caritati* (A2) que *Deus* (A1) est humilitatem nostram placere speramus si caritatis opera faciamus indignum est necessaria petentibus abundantes petita negare, atque eorum precibus aures *miserordie* (A1) non prebere cum ipse nos petere imperet ac se promittat daturum, pulsare et se aperturum; ego igitur *AGOBERTUS* (A1) Carnotensium episcopus Dei gratia ejus vestigiis inherere utile esse et honestum intelligens.

Parisiensium canonicorum et eorum presulis domni *IMBERTI* (A1) precibus aures exauditionis aperio; ut quos consulende *ęcclesie* (B) *nostrę* (A1) hactenus Dei gratia et sua non defuisse sensimus; beneficio nostro quia digni sunt obligati *amodo* (A2) ingrati nusquam appareant; sed quod prius nullisque *precedentibus* (A2) meritis dabant jam debitores facti liberius exsolvant; Do ergo (*espace B*) fratribus *predictis* (A2) in communi habendum altare Spedonensis *ęcclesie* (B); ut numquam vel a me vel ab aliquo successorum meorum aliqua ejus redemptio exigatur; sed *id teneant atque possideant sine alicujus repeticionis infestacione et calumpnia* (A1); *solvere tamen inde sinodum ac circadam non negligant; ne res ecclesiastica omnino a manu episcopi remota videatur.* (A1)

Si quis vero hoc donum quod bonum esse pauci nesciunt qui sciant quia quorum finis bonus est *ea etiam bona sunt, si quis* (A2) *inquam* (B) adnichilare ac destruere temptaverit; auctoritatis divine et pusillitatis *meę* (A1) anathemate jure percussus; quia quod bonum est destruens; *a nullo negatur esse malus* (A1); sciat se *pęnis* (B) affligendum infernalibus atque *ęterno* (A2) dampnandum incendio;

Ut autem hoc donum *per succedentia tempora firmum et stabile permaneat; archidiaconi SYGONIS manibus roborandum obtuli cartulam; cęterisque ęcclesie nostrę prefectis; quorum hec sunt nomina* (A1);

[*croix*] S. *AGOBERTI PRESULIS*. S. *Guillelmi prepositi*. S. *Hugonis Carnotensis*. S. *Ascelini presbiteri*.

S. Huberti sacerdotis. S. Landrici abbatis. S. Fulcherii archidiaconi C[arnotensis]. S. Hugonis decani. S. Fulcherii archidiaconi D[unensis]. S. Ernulfi cantoris. S. Ivonis prepositi. S. Hildegarii subdecani. S. Gerogii prepositi. S. Rotberti subcantoris. S. Guidonis prepositi. S. Sygonis archidiaconi. S. Ingelranni signatoris (B = arrangement de A1).

Et ne ab aliquo successorum meorum hoc donum evertatur, sciant fideles ecclesie hoc sibi me eo tenore dedisse ut illi et successores sui mihi meisque successoribus solvant unoquoque anno Parisius si requisierint C albos panes, duos modios boni vini Parisiacenses, quinque frisingas aut, si tempus fuerit, decem (decem A2) arietes, gallinas duodecim (duodecim B), avenę modium unum Parisiensem (A1).

付録2：史料テクスト対照表

1A=4	1B
<p>IN NOMINE UNILIS ET INDIVIDUJE TRINITATIS.</p> <p>Cum in cupiditatis tyrannide evertereda atque regio karitatis augendo laborandum sit omnibus qui veri corporis Christi quod cum eo in eternum erit membra se esse appetunt; consilium est providere utilitati sue parvitatei nostram, que in via quidem iusticie nondum ambulat, sed ut ad eam perveniat indefesse desiderat. Cum autem tres caritatis partes nemo ferre sit qui dubitet primam scilicet que agit aliquid ut sibi prosit, secundam que ut alii, illi terciam vero ea facientem que sibi simul et alii pro futura cognoscit, diabus quidem prioribus aliqua sed ultime maxima investigandum est operari, quam ex utraque compositam utriusque idem valere videmus; quia vero karitati que Deus est humilitatem nostram placere speramus si caritatis opera faciamus; indignum est necessaria petentibus abundantes petita negare; atque eorum precibus autem misericordie non prebere; cum ipse nos petere iuperet; ac se promittat datum; pulsare et se aperitum;</p>	<p>In nomine unius et individue Trinitatis.</p> <p>Cum in cupiditatis tyrannide evertereda atque regio caritatis augendo laborandum sit omnibus qui veri corporis Christi quod cum eo in eternum erit membra se esse appetunt; consilium est providere utilitati sue parvitatei nostram, que in via quidem iusticie nondum ambulat, sed ut ad eam perveniat indefenter desiderat. Cum autem tres caritatis partes nemo ferre sit qui dubitet primam scilicet que agit aliquid ut sibi prosit, secundam que ut alii, illi terciam vero ea facientem que sibi simul et alii pro futura cognoscit, diabus quidem prioribus aliqua sed ultime maxima investigandum est operari, quam ex utraque compositam utriusque idem valere videmus; quia vero caritati que Christus est humilitatem nostram placere speramus si caritatis opera faciamus; indignum est necessaria petentibus abundantes petita negare; atque eorum precibus autem misericordie non prebere; cum ipse nos petere iuperet; ac se promittat datum; pulsare et se aperitum;</p>
<p>ego igitur AGOBERTUS Carnotensium episcopus Dei gratia ejus vestigiis inherere utile esse et honestum intelligens.</p> <p>Parisiensium canonicorum et eorum presulis domini IMBERTI precibus aures exauditionis aperio; ut quos consulendū ecclēsie nostre hactenus Dei gratia et sua non defuisse sensimus; beneficio nostro quia digni sunt obligati a modo ingratī nusquam apparent; sed quod prius nullique precedentibus meritis dabant jam debiores facti fuerit; liberius exsolvant; Do ergo fratribus predictis in communi habendum altare Spedonensis ecclēsie, nunquam vel a me vel ab aliquo successorum meorum aliqua ejus redemptio exigatur; sed id teneant atque possideant sine alicujus reprobationis infestatione et calumpnia; solveat tamen inde sinodum, ac circaeandam non negligant; ne res ecclesiastica omnino a manu episcopi remota videatur</p>	<p>ego igitur Agobertus Carnotensium episcopus Dei gratia ejus vestigiis inherere utile esse et honestum intelligens.</p> <p>Parisiensium canonicorum et eorum presulis domini Imberti precibus aures exauditionis aperio ut quos consulendū ecclēsie nostre hactenus Dei gratia et sua non defuisse sensimus; beneficio nostro quia digni sunt obligati a modo ingratī nusquam apparent; sed quod prius nullique precedentibus meritis dabant jam debiores facti fuerit; liberius exsolvant; do ergo fratribus predictis in communi habendum altare Spedonensis ecclēsie, nunquam vel a me vel ab aliquo successorum meorum aliqua ejus redemptio exigatur; sed id teneant atque possideant sine alicujus reprobationis infestatione et calumpnia; solveat tamen inde sinodum, ac circaeandam non negligant; ne res ecclesiastica omnino a manu Carnotensium episcopi videatur sinodum inde ac circaeandam unoquoque anno solveat non negligant cum sibi me nihili aliud quanvencionem perdionasse intelligant.</p>
<p>Si quis vero hoc donum quod bonum esse pauci nesciant qui sciunt quia quorum finis bonus est adichilare ac destruere temptaverit; auctoritatis divine et pussilitatis meę anathemate jure percussus; quia quod bonum est destruens; a nullo negare esse malus; ; sciat se poenis affligendum infernalibus atque eterno dampnandum incedendo.</p> <p>Ut autem hoc donum per succedentia tempora firmum et stabile permaneat; archidiaconi SYGONIS manibus roborandum obtuli cartulam; ceterisque ecclēsie nostre predictis; quorum hęc sunt nomina;</p>	<p>Si quis vero hoc donum quod bonum esse pauci nesciant qui sciunt quia quorum finis bonus est et etiam bona sunt si quis adichilare ac destruere temptaverit auctoritatis divine ac pussilitatis meę anathemate jure percussus; quia quod bonum est destruens; malus esse videtur omnibus; sciat se poenis affligendum infernalibus atque eterno dampnandum incedendo.</p> <p>Ut autem hoc donum permaneat neque ab aliquo successorum meorum evortatur sciunt fideles ecclēsie hoc sibi me ea lege dedisse ut illi et successores sui michi et omnibus Carnotensium ecclēsie futuris episcopis solvant unoquoque anno Parisius centum albos panes duos modios boni vini Parisiacenses quinque frisingas aut si tempus fuerit decem ardetes gallinas XIIcimo, avenę modium unum Parisiacensem.</p>
<p>S. Landreci abbatis. S. Hugonis decani. S. Ernulfi cantoris. S. Hildegardi subdecani. S. Roberthi subcantoris. S. Sigonis archidiaconi.</p>	<p>S. Landreci abbatis. Sancti Petri. S. Ernulfi cantoris. S. Hildegardi subdecani. S. Hugonis prepositi. S. Ingelrammi cancellarii. S. Widonis Chanei prepositi. S. Sigonis Harmonis filii. S. Fulcherii canonici. S. Walterii debi S. Widonis levite. S. Hugonis canonici Walteri prepositi.</p>
<p>S. Fulcherii archidiaconi [Carnotensis]. S. Fulcherii archidiaconi [Junensis]. S. Ivonis prepositi. S. Gerongi prepositi. S. Guidonis prepositi. S. Ingelrammi signatoris.</p>	<p>S. Warini levite, Roscelini presbiteri, Johannis medici, Georgii Herbranni, Odonis canonici, Odonis de Sancto Andree, S. Fulberti canonici, S. Magentredi canonici, S. Hildulfi pueri canonici, S. Ernulfelli pueri canonici.</p>
<p>(recedi); AGOBERTI PRESULIS. S. Guillelmi prepositi. S. Hugonis Carnotensis. S. Acedini presbiteri. S. Huberti sacerdotis.</p>	<p>S. Ebrardi vicecomitis. S. Hugonis vicedominii. S. Gauslini casarii. (Crosi) S. Roberthi de Sancto Leodegario. S. Ebrardi Harmonis. S. Gaustrudi dapiferi. Super</p>
<p>Et ne ab aliquo successorum meorum hoc donum evortatur, sciunt fideles ecclēsie hoc sibi me eo tenere dedisse ut illi et successores sui michi neisque successoribus solvant unoquoque anno Parisius si requisierint (crosi) Calbos panes, duos modios boni vini Parisiacenses, quinque frisingas aut, si tempus fuerit, X ardetes, gallinas XII, avenę modium unum Parisiacensem.</p>	<p>S. Odonis fratris regis. S. Tedbaldi comitis. S. Radulfi comitis. S. Manasse comitis. S. Waleranni Ivonis. S. [espacet].</p>